

富座筋書

特 54

20



梅堂國波筆

れて下さり升せト女形(皆々)詫る(鶴)イヤ詫よ及べぬ
是も座興じや併幹雄殿お歸りど有らば金圓の渡申(八百)
ハツ金千圓正お受取申た(鶴)別席よて密々のお咄ムれバ
今暫く(八百)承知仕る失禮乍一寸便所へ(源之)汚案内
をト(兩人)は入(鶴)小繁めハ幹雄ハ氣の有る様子(登美)
夫でも不漸お客の座敷で(歌女)牛窪さんのお噂計り(鶴)
ハツッシヨ又何所ぞで悪く云うト此模様宜敷道具廻る
本舞臺都て下座敷の体以前の(八百)手を洗ふ(源之)水を
掛乍お歸り道ハ淋敷故案事られて成り升ぬ(八百)案事る
どハ(源之)サア其譯ハト叫く(八百)思入有て先刻の酒と
云大事を告るそちが心節忘れハ置ぬ忝ハト下手々(歌女)
走り出牛窪様がおあふを探して浮出故此庭口柄少しも早
く(八百)禮ハ重てト下手々(歌女)付ては入(源之)無難に
お宅迄お歸り被成べよいかと奥方(鶴)敵役(三人)出(鶴)
是小繁幹雄殿ハ(源之)今方ハ貳階ヘト(皆々)(八百)を探
事有て(鶴)扱ハ歸りしに相違おハ(三人)跡追欠てト足早

又は入(源之)私ハ座敷へ(鶴)ハヲ咄ダ有るマア待と申
ホト口説詞臺有て(源之)お前の自由よ成升ぬト行を押
へる此時(歌女)出此場ノ事ハ私しにお預け被成て下さり
升(源之)姉さん捨て置て下さんせ(鶴)ウヌ憎くいやつめ
ト急度成る(歌女)隔てる此模様宜敷道具廻る
市谷門外堀端の場本舞臺都て堀端夜の体爰ハ夜齋婆賣の
(新助)街城の(松助)蕎麥を喰チイ錢ハ爰ハ置よ(新)ハ
有難ム升ト荷をかたげ 午は入(松)満期ハ成て娑婆へ
ハ出たが一文おしでハ法が付ねハ泥熊の所ハ行借ると仕
様ト人音する故思入有て忍ふ下手ハ淺次郎の(菊の助)ハ
百)を乗人力車を引出爪付て灯りを消(菊之)是ハ鹿相を
致し升た只今灯りを付升ると此時以前の(荒)飯(團)伺
ハ出(八百)お切て懸る立廻り有て(菊之)ハ車の上の包を
探取り小隠する敵役(三人)ハ手負ハ成遊ては入此時月出
(八百)紙袂を拾ひ取今の曲者ハ落せし紙袂ト云乍車を
見てヤ、千圓入シ包をバト奪く(菊之)出目那様其か包ハ

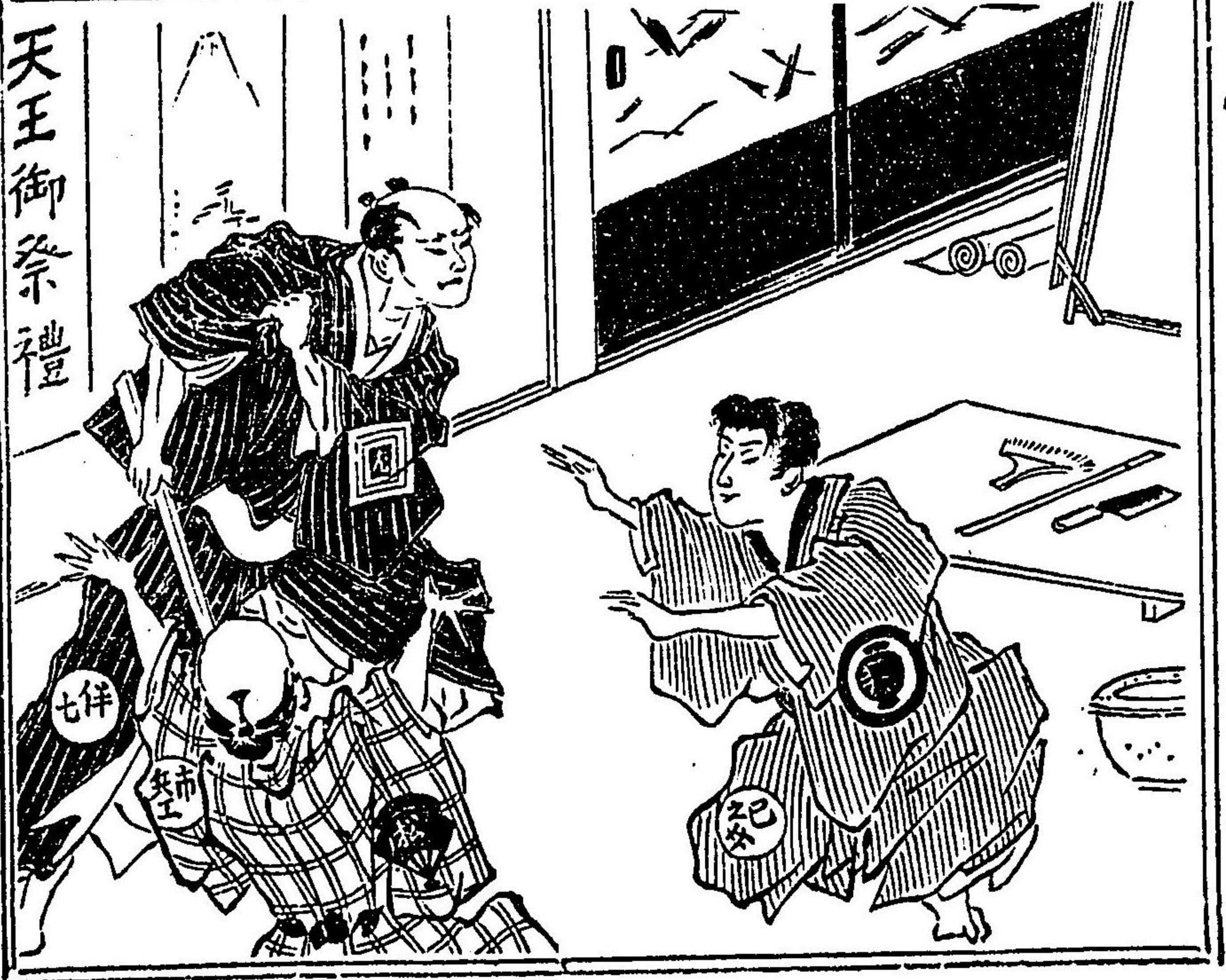
是ム升(八百)エそちハ車夫とふして此包を(菊之)狼籍
者に取りられまいと小隠ハ忍んで持て居り升た(八百)年ハ
似合ぬ氣轉の働き後日ハ禮を致すがそちハ宅ハ(菊之)ハ
禮杯ハ及び升ぬト月隠る松伺ハ出包ハ手を掛る(八百)
又もや賊ダト云乍振拂ふ以前の(鶴)出包をかせお(皆々)
間夜の立廻り此模様宜敷(皆々)引張の見得にて道具廻る
花垣邸の場本舞臺都て奥座敷の体爰ハ花子の(田の助)侍
元の(綾女)(馬三郎)ハ嬢様モウレ休被成升せト奥方の(一
秀調)出娘まだ寐やらぬハ(田の)母様ハ今頃何んぞ御
用でも(秀)サア咄さふや成らぬ事がある腰元共ハ次へ(一
兩人)畏り升たとは入(秀)汚本家ハ呼有し縁談否ク應ク
の返事をせよとの詞臺有て(田の)返事なく泣伏上手ハ乳
母の(繁松)出おひい様のお口柄ハ其返事ハ出来升まい此
乳母ガとつくりお胸の内をお聞申た其上で(秀)成程母ハ
乳母ハ遠慮なく打明て云で有ふ能お願ぞやトは入(繁)
今汚返事を被成ぬハ大方御様ハ汚意ハ入らぬのでム升ム

ホ(田の)どうでハあけれと心ハ濟ぬ事ハ(繁)私ハ何遠慮
其濟ぬ譯を(田の)咄す程ハ離おも云てハ(繁)お嬢様ガハ
隠被成事何で人ハ云升うぞ(田の)云ぬと有れバト仕打有
て密に聞てたもいのムト小聲ハ成此模様宜敷道具廻る
本舞臺都て花垣家入口の体爰に堤の(海老藏)中間の(左
イ助)立掛り居て(海老)其方ハ幹雄殿の迎ハ參れ(左イ)
畏り升たト向ふハ(八百)足早に出堤氏ハ外邊刻致てム
る(海老)至助を迎ハ遺を所其方ハ休息致せ(左イ)ハ入
(海老)途中ハ變でもム升たハ(八百)何おも狼籍者ハ出逢
しと云詞臺有て奥ハ花垣の(家橋)出委細ハ聞しが其曲者
の風体ハ(八百)何れも士族体成ハ遊參跡ハ是成る紙袂故
め見れば此一通と(家)讀終り證據ハ成べき此一書(海老)
シテ願母子の金圓ハ(八百)彼曲者ハ退散車を見れば包ハ
かく扱ハ奪しと思ハの外車夫の影ハて戻シ包(海老)其者
ハ知る人の(八百)在せぬ者故宿所を聞んどせハ折柄又候
曲者ハ出逢ハ見失ハしが藝妓ト云車夫と申平民ハ見上

た者(家)願て住所を探察致させ厚く禮を致さんと(左イ)走り出口今乾の隅のか土藏へ賊は入た様子もム升(海老)ソレト走りは入(八百)動を忘る甚兵衛引立參れ(左イ)ハット下手へは入(家)堤が見届か参つたれバ今分るで有らト(海老)出小鍛治の短刀相見得升ぬ(家)何宗近ガヤ、ト驚く(左イ)甚兵衛の(關右衛門)を引立出(左イ)此通り酔て寐て居升た(海老)コレ甚兵衛只今か土藏(賊)が忍び入し(關右)何泥棒だト云乍番木を叩く(海老)狼狽者めが是迄親子三人露命を繋彦恩を忘酒お酔伏夜番を忘り憎き老ぼれト(關右)酔の覺し心今更申譯もム升ぬ(家)彦本家々懇望の短刀紛失とヤ上しも偽ありと彦疑念有は是を兩家不和の基ひ 殆當致致すト(關右)思入有て其申譯ハト刀を腹へ突立云譯の詞臺有て(八百)切腹させバ彦疑念ハ申申さんと奥方(秀)出櫓子の次に聞升たが犯科と云乍跡お殘妻の歎ハハハ計り(家)氣遣致す亦行末扶持を遣すと(關右)エ、添ヒト落

入る(家)短刀紛失致す上(秀)娘は是非共彦本家へ(家)何れ一トツの聞ねバならぬト思案の思入此摸樣宜敷幕(四立目)理髮床の場本舞臺都て西洋床爰も七藏の(門藏)前幕の(荒)の髻を剃下鞠の(橋次)丁稚の(仲太郎)あたまを対込居る(断)讀賣の(八平次)新板徴兵の早分り定價の僅六錢でム(門)チ一冊買ラト呼込み(皆々)詞臺有て(門)本を買子僧さん此本を遣がお前の内の親方の書舞だ柄叱れると悪い(仲)内證で晚見升是ハ有難ふト入(八平)徴兵令早分りト呼入は入向ふか士族松の(菊五郎)出親方此間(門)松さん五六日見へぬの(菊)江の島行の客で六日一日懸り升た(橋)七日を六日一日と開化さねへの(菊)大嫌ひだ(門)好き新宿のお千代さんの文が届て居せ(断)其お千代と申娘妓お問夫々有と聞たが(門)此車夫の女房も成と云て居升(荒)夫で僕を振たのウト向ふも己之助の(高助)出車屋の松さんウ舎弟の淺さんと大ぶ精を出升(門)己之さんも彦勉強だげけも仕事でムリ

升(高)花垣様へ天井を張り参り升た(菊)張といへバ其彦郎のお嬢様が己之さんと張らうだ(橋)いくら惚て居ても先ひだ(門)生利な事を云(橋)夫でも己之さんか今年廿ナさら(高)本年二月が適齡の満二十年故出るので(菊)俺も廿ナだが出るも出ぬものか(高)親が六十有余から免役も成六十以下から出ぬバ成ぬ此徴集お應じるが四民共其身義務と云もの(菊)義務でもごひでも出る物のト(菊)(高)奮闘を争ふ詞臺有て(高)を打お懸る(皆々)留て(荒)コレ我輩兩名中裁だ(断)双方共了簡致せ(菊)お貳人お免トて不肖仕升(高)元々知己腕力の好升ぬ(菊)飛だ彦厄介おあり(高)有難ふム升る(橋)旦那大きお遅く成升たト(断)の盾毛を剃落しコリヤ大變な事を致し升た(断)我輩の盾毛を落した是でハ役者の様だ(菊)私が眉毛を引て上(升)ト眉毛を引(断)コリヤ猫の様じやト(断)猫の笑可お成り此摸樣宜敷道具廻る大經師内の場本舞臺都て見世先の休爰も職人の(竹次郎)



天王御祭禮

以前の(仲)徴兵令の本を見乍(竹)己の助さんの本を譲柄
開けて分り、早イ、親方の舊弊で(仲)強情な元天窓た
奥伴七の(左)兩次(出元)天窓との誰が事だ、仲、お前さん
の事(左)エ、口答へをしやアがるト打と(竹)留る下手
と差配人の(團右)出留る詞臺有て(左)大家さん何ぞ用
(團右)用と云己の助殿を徴兵お稱々出さね成ぬ(左)
たつ、登人の家督人誰が出すもの(團右)夫でも四年跡
柄お上へ名前がわがつて居て今年が徴兵適齡故否も應も
有るものが(左)是迄育て徴兵お引上られてたまる物か徳
川おの恩が有て天窓おの恩がねへ柄出さねへのだと(兩
人)云争う詞臺有て(團右)そんな分らねへ事を云ねへで
此本を讀で見ろ(左)こん本の下張にでも仕て仕舞ト市
兵衛の(松助)出留る子聞たが前前の云の尤だ(左)無理
でい有り(松)決して出さぬ云俺も悴も五年跡聞か當
人代の金ぐねへ故子を登人捨る積で出したが未だ死だ
う生たう便りもあく實は寐覺が悪い(左)まだ其頃の長男

を殘された柄よけれ共たつ、登人れ悴を連れて行れて、實
は困る是迄天窓柄百錢一枚貰つた事がねへ柄思も平も有
ものト(兩人)にて悪く云詞臺有て(團右)分らぬ人達だ
今度の涉趣意の華士族平民の差別なく慕お應じて出る徴
兵勉強次第で出世をすれば直官員に成られるのだ是非共
悴を出しませ(左)エ、達てと云バ大家が相手だト立掛
るト以前の(高)伺ひ居て(高)親父様様子の聞升たが夫の
無理と申者先早イ、日輪の光と同シ皇帝の光は依て萬
民鼓腹の樂みもト諭す詞臺有て私をぞり悦んで今度の弊
りも應シ升(團右)是の感心奮弊の伴七さんの悴お開化の
仁が出来るるとい、庶が鷹と云のだ(左)何をぬのしやアがる
ト立掛る(團右)述ては入(左)大家や悴は理屈を云れ胸が
悪くあつ(松)そう云時わの酒に限る(左)延喜直しよ一
杯遣うト(兩人)下手へは入床の淨瑠璃お成向ふ前幕の
(田の)(繁)出己之助殿内居やつた(高)是のいひい様
も一所よてト換撥有つて(田の)トとあたま願み有

る(高)私へ頼と(田の)此歌の返事をして貰ひたさト
短冊を出(高)コリヤ戀歌でム升るか(繁)其涉歌の色能れ
返事をト取持詞臺有て(高)此涉返事のお断を申升る
(田の)そりや願欲ちト口説詞臺有てとよぞ此戀叶へてた
も(高)いり様お仰せ有共多年の涉恩を仇おあし不義徒が
出来升ふト門口お前幕の(秀)伺居子甘ひの親の常免
してたも(高)奥様おも存存よて(秀)涉本家の涉舎弟ト縁
組極れバ娘が命に懸わる事あれ共一通りの意見をまたが
母も好ぬ縁談されと只お断も申難く夫故乳母が進めよ不
義の汚名を受ける共娘が命助度とよぞ娘が願ひをバト(高)
思入有て左様お仰有を不得心おムらぬが私の徴兵お出
ね成升ぬ(秀)スリヤ徴兵の適齡成か(高)四年立ねバ歸
られず又事變に依り生死も分らず涉願の承知致せよ二世
の固の歸りし上ト(左)松)門口お是を聞(左)奥様がお免
あらいつと對よ成て徴兵を退るが能(高)涉改正よあつて
柄ハ六十以上の親成ね(松)夫でいひだか(左)エ、腹の

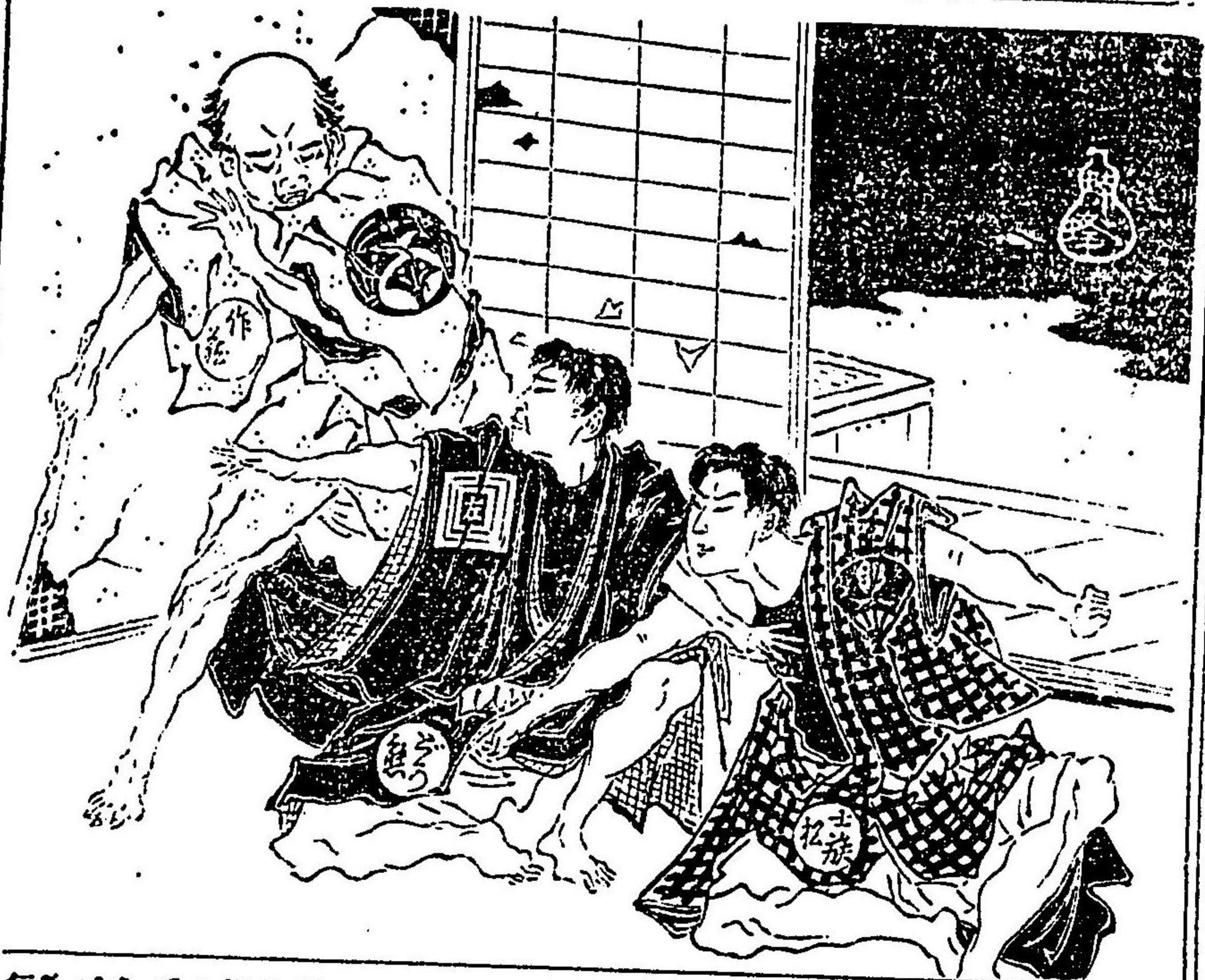
立事だおアト女房の(鏡次郎)足早お出コレ市兵衛殿徴兵
に出た悴が歸て來升た(松)何だ悴の市の助が歸て來たと
んお形をして來た(鏡)私が嫌ひお洋服で(松)早く逢てへ
物だト下手お昇の(家)橋)出親父様涉健勝でム升た(松)
ナ、悴(左)官員と思つたら(高)以前の友の市さんかト
(皆々)換撥の詞臺有て(松)悴何役も成たのだ(家)五ヶ年
間勉強おし今の陸軍大尉迄登庸致してムる(鏡)名前いや
ツぱり市坊(家)改稱おして月形昇と申升涉兩親共安樂
よ貢升れバ涉安心下され(高)親父様お聞被成升たり徴兵
に出升ても勉強次第で市の助さん同様出世が出來升る
(秀)そう成時よの表向(田の)世間暗て縁組の出來るも上
の涉取立(繁)以前の出來ぬ平民柄一足飛の立身出世(家)
是皆文明開化の世よ生出來る身の幸福(松)内から三文仕
送すこう云身分よ成柄(左)俺も悴を出と仕様(高)漸々
道理が分り升た(左)何の事かね(夢)の覺た様だト(團
右)出伴七さんが得心で安心仕升た(秀)こちらも目出度

咄を聞夫と土産を聞升(左)五條成ればお貳人樓(高)四年を待下より升ト此様宜敷双方引張の見得て幕(五立目)作藏内の堀本舞臺都て人力屋の休爰に淺次郎の(菊)足を洗ひ居る(新相中)の車夫兩人淺さん大そう早ひ仕事だの(菊)今新富町の芝居迄彼て來このさ(車夫)若いよして能稼息子を持つ作藏さん仕合だ夫よ引替兄の松さん三拍子揃た道樂者俺達迄釣込れた堀の内行り芝居の客を乗てへものだト兩人は入路次口をお松の(燕)出淺さんモウ新富町へ往て出かへ(菊)ハイ今歸て來た計サト芝居の噂の詞臺有て(燕)是れ少し計でムんすグト蓄物を入富貴豆を出(菊)是れ毎度有難ム升ト向ふ小繁の(源)さいの箱屋付て出(源)淺やおどつさんいお内か(菊)姉さん能出だね(燕)お繁さん久敷お目懸り升ぬ(源)チャお松さん兄さん日仕事もお出くへ(燕)ハイ今日休んで居り升(菊)姉さんア内へお入あト(皆々)内へお入る奥方作藏の

仲藏)出お繁能尋て來て呉た(源)此間柄見が悪い故夫で一才(仲)案事する事のない痴氣の俺が持病だ(源)夫聞て安心仕升たどさんお松さんも能娘お成だね(仲)此子の兄以前遊び人だ今堅氣又成つた故堅い人の女房遣たいと言て居るのだ(源)そう云事から淺の女房ト縁談の詞臺お成(菊)仕打有て奥へは入(源)の思入有て札を一寸包是れ失禮じやがお土産の印好物を買て下さんせ(燕)姉さん有難兄さん見せて参り升トは入(さい)思入有て一寸手水は往て参り升ト下手へは入(源)金包を出是れおつさんの小遣残の淺お着物を買て遣て下さい升(仲)淺やト呼(菊)の出何ぞ用のへ(仲)お繁がお金を呉た(菊)姉さん有難うム升(仲)十圓有るがどこのお客は貰つたのトや(源)花垣様の家來で幹雄さんと云お人よト(さい)出モシ小繁さん牛窪さんが参り升早く何所ぞへ(源)お前も見付られぬ様ト(兩人)上へ小隠する向う前幕の(鶴)荒)出作藏殿の宅へ居るの

(菊)ハイ内へ居り升る(兩人)免しやれト内へは入(仲)あまた方(荒)小繁を最負お致す者(鶴)シテ其方が小繁の親でムるの(仲)左様おム升(鶴)今日態々参つたの小繁を身が妻お致さんと抱主へ掛合し前借百事で二百圓から宜敷有る故親たる其方へ掛合お参つた(仲)左様なら娘も其事得心でム升ふさ(鶴)再應申せど娘の返事を致さぬ故(荒)親の威光で得心させて呉まい(仲)縁談計りの親の自由よト士族松の(菊)門口お伺ひ居てイヤ小繁私お上りト内へは入(鶴)そう云費さま(菊)小繁が兄の士族松と云者サ(鶴)夫で親お成り替り妹を呉る(菊)お上り柄のつちの望も聞て下さい升うね(兩人)シテ其望と云(菊)サアあまたが立派の身分よこつちの傍の家業だ以前が士族文侍羅を飾て上たいのら先婚禮の着類諸道具がさつと積て千圓其外親父や俺達兄弟の形が一人前百兩諸雜費が貳百圓都合で千五百圓下すつたら妹を奇麗お上り(鶴)イヤ大きき事と巻出た

お(菊)高いと思ふからいくらでも直を付るト悪いよ詞臺有て(鶴)余り高直で相談が極らね(荒)又出直して参るで有うト(菊)の思入有てお前此間牛込でト(荒)エト仕打有て長居り忍(鶴)少しも早くト(兩人)足早よては入(源)の(さい)出(源)の兄さんのお影で助つたわい(菊)チ、妹内へ居たの(さい)今ので牛窪さんも何ん共おつぢやるまい(菊)今淺が見た人だと云たが譯でも有る事か(菊)此間神樂坂下のお堀端で金を奪合ひし詞臺有つて(さい)小繁さん堀の内へ出懸升(源)の牛窪さんのモシ途中(さい)夫の私が代参を仕て参り升トは入(菊)俺が留守よ友達が來た(仲)イヤ誰も來ぬが差配人柄手前が徴兵の圖と云て來た(菊)鹽圖は當るんが何んで徴兵お出ぬへ法が有柄案事おさん(仲)俺が六十以下成バ死役お成る譯がない(源)兄さんの出さい法と(菊)



の)と云譯か呷して下され(菊)何の譯のねへ事だ酒を
 呑で喧嘩をして人お疵を付れば規則通り俺の徴役先夫で
 徴兵の方にお流だ(仲)ウヌ見下果た人であしめがモウ丁
 簡がト刀を取出シ(菊)を切らんとする兄弟まで宜敷留る
 (菊)の殺せと云泥熊の(左團次)路次方出留る事有て(左)
 喧嘩の譯の知らぬが俺お預て呉(仲)憎イ奴だが我子の事
 とよぞ無理屈を云ぬ様お(菊)誰が無理屈と云物か(左)ハ
 テ何んおも云ずは俺の内へト(左)(菊)と運ては入(仲)思
 入有てアノ性根でい未々案事られるわい(源の)其様お心
 配してのお體、際り升る(菊)の氣晴しお是さとお上り被
 成升せト以前の蓋物を山(源の)コリヤ私の好お富貴豆
 (仲)何富貴とい延喜が能ト笑う此模様宜敷道具廻る
 泥熊内の坊本舞臺都て裏長屋の体爰より以前の(左)(菊)下
 手お三立目の(お松)酒を呑側よ(斎)耐をして居る(菊)方
 次さんいっつ佯柄歸たのだ(松)十日跡満期で歸たが是柄堅
 氣又成積(斎)兄さんお耐が出來升た(左)跡の付つよ置

ト床の淨瑠璃お成(三人)酒を呑事有て(左)時お松さ
 ん何で喧嘩を仕たのだ(菊)親仁が徴兵お出ると云柄俺の
 出ねへと云争つたのよ(左)夫の出ねお成らぬ(菊)出ると
 云のにお上が無理だと云不利屈の詞臺有て(左)おめへお
 も似合ねへ伊國恩を知り乍ト徴兵令の詞臺有て(菊)達て
 と云バ懲役又往つて退る氣だ(左)夫の小さあ丁簡だ大き
 く持て世界の爲の徴兵お出ると云(菊)否だと云乍酒を呑
 聞ぬ仕打(左)俺も五年跡おめへと同じ様徴兵が否さお窃
 盜して佯お苦役中説教を聞改心したと云詞臺有て然今更
 堅氣お成ても泥熊お人お云るゝ口惜さは迄兄弟同様まし
 た中故誠の人お仕てへ柄だト(菊)思入有て眞身も及ばぬ
 意見なれと聞かれへ譯か有る故(左)其譯と云(菊)爰で
 い呷しおく(斎)私お松さんのお内へ(松)わつちり湯へ
 は入て来よト(兩人)は人(菊)仕打有て俺の實の此の間
 盜をした(左)エト思入(菊)花垣様の土藏を破て宗近の短
 刀を盜で来たト以前の(仲)(源の)(菊)の(出)(仲)(菊)を打

居(仲)いりよ下腹お落れば連盜を爲とい何事ぞ(源の)お
 金が入るからナせ云てい下さんせぬ(菊)の盜をすれば一
 生涯其悪名の拔升ぬ(菊)其恨の尤もだが短刀を盜ごは彌
 々徴兵と云時お其品持て自訴すれば僅の間の懲役も満
 期おされお死お身に成様で親も樂とさせる俺が心疑ひし
 くバ萬籠の底を探て見やれト(菊)の短刀を探持来る(菊)
 是方直よ自訴爲ん(仲)コレ待夫方お花垣様へ伊歸し申し
 (源の)心得違て盜をまたも(菊)の元へと云バ親の爲と歎
 願と被成たら(菊)成程伊免お成まい物でもお(左)善の
 急だ少し早く(菊)合點だト行懸る(仲)ア、是(菊)案事お
 さんおト仕打此模様宜敷幕
 (六立目)大經師内の坊本舞臺都て見世先の体爰よ差配人
 の(團右)七藏の(門)經師職の(竹)(小半)合長家の(芝養
 郎)(宇十郎)下刺の(橘)丁稚の(仲)酌をして(皆々)酒を
 呑乍(門)今日徴兵に出来る己之助さんの立振舞で(團右)
 差配人始め近所の者迄馳走を爲とい珍敷事だト奥方(高)

出汐町内の旁々もお揃い成升たれば皆様お揃い奥へ汐出下さりませ(團右)左様おらお辭義おしよ(皆々)汐馳走お成升らト(皆々)は入(高)親父も漸々政府の厚い思召を有難と心付立振舞造して下さるの何寄以て忝おひト向ふかお花の(田)の出内を覗そこよ居る己の助か(高)花垣のおひい様見れば只ち獨で(田)の忍んで来たハそあたケ徴兵よ出ると聞暇乞よ來升たわいの(高)夜分も厭ず能汐出下さり升た併お宅で汐心配少しも早くお邸へ(田)のサア歸るの歸るがモム長い別よ成りせぬりと夫が苦勞で成升ぬわいの(高)ハテ何もお案事被が升るお歸宅致せバ世間暗て夫婦中(田)の(夫)樂に待て居るわいのト契にて(竹)己の助さん早く奥へ來て下されト呼(田)の任打有て向ふへは入以前の(皆々)(團右)を抱き出大家さんが頓死を仕升た(高)まだ脈が有柄呼吸活て見て下され(皆々)おて呼活る下手お女房の(鶴藏)出モシ徳右衛門殿氣を儲お持て下さんせト氣が付ぬ思入おて事の切たかワアトト泣伏(高)

是れりみさんまだ脈が有柄案事する事い(鶴)一体内の人の何で目を廻升た(門)實の大家さんやたら詰込だ故(橋)慈姑が咽へ引掛り(竹)こんな事に成たのよ(鶴)エ、去との情おい慈姑と一所又情死とハト笑可の詞臺有てワアトト泣伏(門)何おしるモウ一篇呼活るの云ト(皆々)大家さんヤアイ欲右衛門さんヤアイト呼(團右)ム、ト目を開く(皆々)べたトト(高)是氣を儲おト抱起す此摸樣宜敷道具廻る

四谷門外の場本舞臺都て汐堀端の体爰よ傳八の(荒)藤六の(團)專藏の(斷)立懸り居て(荒)日外幹雄が所持の千圓を奪取んとおしたる時(團)大事の密書を拾はれて牛窪殿を始として(斷)我輩迄もお拂ひ箱元の起りあの花垣意趣返しに能策が有とよな物だと向ふ方(田)の出三人見て(荒)ヤ花垣の息女お花殿(團)人足遠き堀端で出逢とハ幸ひ(斷)娘を慰み花垣が日頃の意恨を晴して呉る(田)の父に意恨が有る迎も此身の知ぬ事故にどうぞ免して下さ

れいの(荒)面倒だ人の來ぬ間よ(斷)(團)念佛講だト(田)の(を)手込お仕様とする(田)の(誰)を助て下さり升せト逃廻る向ふ方前幕の(菊)出此中へは入敵役(三人)を突退る(三人)見れば賤い平民何故邪尸立致すのじや(菊)女を手込よする柄の大方物取強盗成らん(三人)面倒だ打殺して堀へ打込で呉んと打て懸る(菊)(三人)を相手に立廻り有てトト(菊)短刀を抜切て懸る(三人)逃ては入(菊)モシか怪我を被成り仕升ぬり(田)の何れのお方存升ぬケ危ひ難をお救ひ下され有難ふム升る(菊)何の禮よい及ぬ此短刀が有た斗りで皆な逃て行升たト(田)の箱を拾ひ見てコリヤ見覺の有る此白箱ト(菊)思入有て此箱を汐存有るのモシヤ花垣様の(田)の娘の花子と申者ト上手お乳母の(繁)中間付出(繁)夫よお出遊そいおひい様でハム升ぬり(田)の(ナ、乳母の今恐者お取巻れ危ひ難を此お方よ助られたいの(繁)夫ハ有難ふムり升 何と汐禮を申て能やら(菊)何んの禮おハ及ぬ今の奴等の來ぬ内よ(繁)明朝汐禮

よ上り升れば汐住所汐名前を(菊)所を云よい及ぬ私しもお邸迄用事有て参る者(繁)夫ハ何ん心丈夫(田)の(一所よ往てたもいの(菊)お送申でム升らト此摸樣宜敷道具廻る花垣邸の場本舞臺都て座敷の体爰よ奥方の(秀)腰元の(綾)(鶴)よ向ひ(秀)今乳母が迎ひよ行たれと戻の遅ひハ心掛りの事じやおト奥方花垣の(家)出未花の行衛が知れぬり(秀)ハイ乳母の申おハ豊川様へ参りしとの事(家)娘が獨歩行致す杯と他家への聞へ娘ハ勿論其方迄の落度成るとト(秀)腰元詫る詞臺有て以前の(繁)(田)の(を)連出(繁)おひい様をお連申てム升(家)女の身おて夜お入て戻る杯とハ以外の事成ぞ(田)の(心)願故よ豊川様へ参詣致し夜お入しハ此身の誤り以後ハ急度昇る(家)奥をちより堅や聞せよ(秀)コリヤ娘ト仕打有て顔の色の常成ぬハ何ぞ子細の有る事ト(繁)おひい様が恐者お出達しと云詞臺有て(秀)助けし其者を是へ伴ひ來やれ(繁)長り升たトは入堤の(海老)出花子様よハ汐歸邸遊ハ汐悦びヤ上

升るト(紫)(菊)を連出(紫)則ち助け升たハ此者ムリ升
る(秀)娘ガ難儀ト救ひし其方厚ラ禮を云升ぞ(菊)忍入
たる其お詞(海老)救し次第をヤ上よ(菊)危き難を救ひし
事柄を咄す詞(海老)シテ其方が姓名ハ(菊)四谷竹
町で藤掛松太郎トヤ人力車夫尤も舊幕の折ハ奥力を勤し
者(家)厚く報ハ致有ら(菊)其汚禮あら私の罪をお免
下さり升せ(家)あお罪を免與よと(菊)何を隠そふ私し
ハ盗人デム升(皆々)驚(菊)然も先月七日の晩宗近の短
刀を盗取たり私デム升(海老)其賊の名乗出しハ仔細有
ん(菊)サア私しハ今年廿才で徴兵の適齡も親の爲ム退ん
と懲役も成る心得で盜を致升たガ友達の意見ハ付て心付
徴兵ハ出たム升故短刀ハお歸しヤ升れハ其夜の事ハお
取消下さる様お願ひヤ上升る(家)恩有る其方取消て遣し
たいガ一命捨し者有れば(菊)中々人杯を切た覺ハム升ぬ
(家)夜廻りの甚兵衛トヤ者役目の落度ハ切腹致して相果
し(菊)エ、ト思入有て其甚兵衛ト云者のハ女房子でもム

升るか(海老)何おも妻子有りシガ娘ハ親の爲ハ新宿へ苦
界の勤(秀)殿ハ甚兵衛ガ菩提の爲其娘を身受遊し(田
の)殿ハ橋の母の内(昨日往たわいの(菊)夫ハ善根
事デム升る夫ト聞ハ付濟ぬ事を致し升た(家)譬ハ其方改
心させト一度盜を訴ハ出處刑を受ねハ相成ぬト下手ハ幹
雄の(八百)(菊)の)を召連出(八百)只今松太郎ガ弟トヤ參
りし此者ハ千圓の包を戻し者にム升る(菊)弟ハ(菊
の)親父様ガ案事ハ故様子を聞ム參升た(菊)泥鰌の云た
通徳役ハ成散故徴兵ハ出られぬト後悔の詞(家)有て(家)
コリヤ弟とやら千圓守護せし禮を還すト百圓出す辭退ト
とる臺詞有て(菊)の)此金をお貰ひ申せハ親父様も困らね
ハ兄の代りハ徴兵ハ(家)適齡ならねト願て出るとハ流石
ハ士族(菊)俺ハ是ハ警察へ(家)門外迄送り遣せ(八百)ハ
ツ(菊)(菊)の)有難ム升辭義をする此模様宜敷道具半廻
本舞臺都て以前の庭口の裏を見せし体(八百)先ハ(菊)
菊の)出(菊)是ハ飛だ彦厄介ハ成升た(八百)金圓を落さ

ぬ様(菊)の)汚心極有難ム升(菊)俺故命を捨て甚兵衛殿
の内ハ一寸(菊)の)命を捨てた(菊)其事ハ今ハ分るハ
(八百)思入有て花曇のして大々空(菊)とムで今宵ハ雨
でム升ラト愁ハの仕打此模様宜敷幕
(大詰)新寺町大教寺の塙本舞臺都て本堂の体爰ハ前幕の
(鶴)(門)(橋)合長家の(芝)同(新相中)三人立懸り
葬式跡の心(橋)是柄焼場へ行柄内義ハ内へ歸りあせへ(鶴
鶴)親方始皆さんハお隙を費させお氣の毒ム升ト泣居
る(芝)おんち丈夫ハ大家さんガ死のふトハ思わさんだ
(宇)是も約束事と諦るガ云(鶴)彦厄介ハ成升も内の人ガ
喰意地ガ張て居る柄の事併定命故仕方ハあいガナト親方
ハ相談ガ有升(門)相談トハ(鶴)三吉殿を今夜柄泊によこ
して呉ト笑可の詞(家)有て(橋)を追廻乍らハ入(門)吊
ひの濟ぬ内ハ倦返つたばアさんだ(芝)焼場といつても
根谷爰柄ハ直た(宇)臺所ハ残て居る酒を呑で(門)出懸
ると仕様ト(皆々)下手へハ入床の淨瑠璃ハ成向ハ後家の

(國太郎)お千代の(紫若)出る上手ハ番僧の(妻藏)出是ハ
能こそ參詣詣今日ハ甚兵衛殿の二七日汚焼香を被成升せ
ト云捨は入(兩人)位牌ハ向ハ(紫)是ハどとさんハ戒名で
ム升の(國)又物で死ハ印ハ劍の一字ガ入て有わいのト
回向の思入向ハ前幕の(菊)出(兩人)を見て漸々の事で尋
當たト舞臺ハ來りハ袋ハ寺參ハ(紫)お前ハ松さん(國)能
尋ねて來て下さつた(菊)見れば白木の位牌夫でハ是ガ
父さんの(國)位牌の前で落合も何んぞの縁(紫)回向を
して遣て下さんせ(菊)回向を仕乍ト思入有る(紫)松さん
昨日髮結床迄出した文扇升たり(菊)文ハ扇ハ用でも有
たの(紫)サア私シヤ花垣様ハ受出され親元ハ戻たト云
詞(家)有て(國)思入有て改て頼ガ有ガ聞入てハ下されぬハ
(菊)其頼ト云ハ(國)娘ハ夫婦約束の仕て有ハ前幸ハ位牌
の前で夫婦の圓をト詞(家)有て(菊)俺ハ思入(紫)腹の立
仕打ハて(紫)返事のハ今とありハ心變ハしたのハ
(菊)何で俺ガ(紫)夫ハ違ハムんせト恨の詞(家)有て(ト

詞詰お成(菊)返事の出来ぬの何を隠そ(高)同土故(國) (紫)エ、ト胸り思入(菊)宗近の短刀を俺が盗で逃た計り 其云譯お甚兵衛殿が腹を切て死さ故俺が殺たも同前位牌 の前で貳人して俺を殺菩提の爲手向て下せ(國)そんならわの夜の盗賊(紫)遊里の金詰りし故元と云わ 私柄起つた事(國)思入有て甚兵衛殿が非業な死も是も其身の報ひぞや(菊)何其身の報とい(國)夫の舊惡語も罪消生滅と聞てたも十七年跡三筋町の藤掛と云與力の内へ盗おは入し事(女房)さへ云ねと天網退す召捕れし(菊)一新めて命助り聖氣も成と以前の報ひと氣が付(人)を恨む様い(菊)其藤掛と云俺の親の内だ(兩人)エ、(菊)其盗賊よお袋の突倒されて肥腹を打夫(元)で死んだと親父の咄幼心に忘る敵の賊(甚兵衛)殿有たるか(紫)名乗て見れば添え添れぬ敵同土(三人)顔見合せ思入上手(伴七)の(左)巳の助の(高)出(左)其裁判(親)子の者(高)任して下(菊)離うと思へ(經)師家の(親)子(國)

(紫)任よとおつしやる(左)差配人の葬式お來て(高)思はず聞た此場の懺悔ト(左)(高)(三人)又説諭の詞臺有て(高)今開明の世の中敵同士のヤレ死のふ杯とい心得違ひ(左)わしが媒人仕升(柄)位牌の前で貳人共夫婦に成と極て下され(菊)貳人の説得は何も夫婦成たいが懲役よある此骸(紫)滿期で無事お歸をお待り居り升るト前幕の(源)の出兄さん悦んで下さんせ身儘お散らつたわい(菊)菊)と云譯でト下手(幹)雄の(八百)出其子細と云(千)圓奔んと巧し密事を知らせし小繁又途中の難を弟たる車夫(影)影めて命圓の戻し禮(小)繁が前借濟せし(源)の(まだ)其上(幹)雄様と夫婦として遣ふと花垣様の(仰)菊)スリヤ妹を有難ふ(升)るト向ふ(前)幕の(菊)の(足)早お出兄さん愛ふ(升)つたの願ひの通徴兵(お)前の代りに出られ(升)る(高)また適齡(な)らぬの(左)愛らがやつばり文明開化(た)橋掛(幕)明の(門)(橋)(芝)壽(宇)合(長)家(皆)々(差)配(人)の(團)右(を)脛(上)よして出(跡)を(鶴)付(て)出

コレヤ折角生返つた佛を其様(様)で(成)らぬ(卸)して下(さ)んせト(團)右(を)卸(す)菊)そんなら佛(が)皆(々)生返(つ)た(菊)是(で)貳(度)添(を)探(に)及(べ)ぬ(團)右(思)入(有)て(と)また(も)遠(方)苦(勞)様(ニ)ム(升)る(高)愛(へ)落(合)人(達)ハ(八)百(何)れ(も)目(出)度(身)の(納)まり(團)悦(ぶ)中(よ)只(一)人(紫)悲(劇)別(を)と(る)と云(ハ)源(の)是(柄)自(訴)する(兄)さん(斗)り(菊)の)そんなら(と)ふ(で)も(懲)役(に)菊)滿(期)で(歸)る(を)待(て)居(や)れ(左)夫(で)い(こ)あ(た)を(送)り(乍)八(百)こ(ち)ら(ハ)連(立)皆(々)歸(り)升(う)團(右)ど(ぶ)ど(皆)さん(勝)手(に)鶴)お(引)取(下)さ(り)ませ(門)皆(々)モ(ウ)一(番)脛(上)よ(菊)ハ(テ)假(も)思(さ)ハ(被)成(升)お(隔)てる(皆)々(引)張(の)見(得)宜(敷)幕(中)幕(の)口(多)田(滿)仲(館)の(場)本(舞)臺(都)て(涉)殿(の)体(愛)よ(相)中(の)近(臣)六(人)我(君)滿(仲)公(涉)退(隱)故(京)地(守)護(ハ)涉(橋)子(た)る(滿)成(君)た(り)し(ガ)涉(病)氣(故)頼(光)公(へ)換(ら)せ(る)ふ(然)る(に)君(涉)通(世)の(願)ひ(涉)許(容)あ(ら)故(菩)提(の)爲(と)美(丈)丸(君)を(中)山(寺)へ(登)ら(せ)善(規)老(を)師(と)頼(涉)留(學)中(涉)不(行)跡(が)上(聞)え(達

し(仲)光(殿)へ(涉)預(と)の(事)ト(知)貴(の)團(右)出(仲)光(殿)へ(涉)使(者)に(參)り(し)信(行)殿(未)だ(歸)館(さ)き(ヤ)ト(向)ふ(て)信(行)の(八)百(只)今(夫)へ(ト)出(我)君(の)仰(を)逐(一)す(述)た(れ)ば(直)様(出)仕(致)で(ム(團)右)此(由)我(君)へ(八)百(委)細(承)知(仕)る(ト)上(手)へ(ハ)入(向(ふ)仲)光(の)團(十)郎)出(過)急(の)涉)召(ハ)美(丈)丸(君)の(涉)事(成)ら(ん)各(々)方(よ)も(お)執(成)お(頼)り(團)右)下(万)民(ハ)の(見)せ(し)め(成)れ(ば)多(分)涉)採(用)ハ(ム)る(さ)し(ト)奥(方)滿(仲)の(左)以(前)の(八)百(小)姓(兩)人(附)出(左)過)急(の)招(ハ)外(成)ら(ず)美(丈)丸(不)行(跡)ト(云)詞(臺)有(て)夫(故)目(通)り(を)遠(ざ)け(汝)が(許)へ(預)け(し)ぞ(團)君)意(よ)ふ(れ)た(る)若(君)日(夜)お(諫)を(入)し(所)涉)改(心)有(て(お)詫)致(呉)よ(と)再(三)の(涉)頼(何)卒(涉)宥(免)の(程)皆(々)臣(等)一(統)お(願)ひ(ヤ)上(升)る(左)臣)下(の)歎(願)聞(届)難(さ)ハ(田)畑(を)踏(荒)し(農)民(を)切(捨)有(る)と(わ)ら(ゆ)る(彼)が(振)舞(團)左)様(お)事(を)誰(が)我(君)へ(八)百)尾(に)尾(を)付(て)上(し)り(團)右)某(が)内)命(受)探(索)あ(し)て(言)上(致)した(左)切)害(され)し(親)々(ハ)嘸(や)美(丈)と(恨)ま(ん)彼)師(父)の(命)も(と)り(懸)る(惡)業(を)事)前(未)聞(無)類(の)曲)者

生置ての家名の恥辱二葉の内は菊すんば頓て斧を用ゆる
よ至らん彼又罪條中聞せ今日首打持參致せ(團右)爰が依
估無修政道(團)君命背くハ恐入也只管穩便の義をト執成
詞臺有てト詞詰成(左)一子を切も天下の爲得打(團)
畏てム升るト思入有ては入(左)菩提の爲と入學させしが
予が望も達せぬ愚者故不便成ハト仕打此模樣宜敷道具廻
仲光郎の堀本舞臺都て邸宅の体爰又宗治の(門)若君ハ
我君の修歸宅をお待兼ト云詞臺有て床の浮瑠璃お成向ふ
ハ(團)出る奥ハ美丈丸の林檎出仲光父上の修様子ハト
團)思入有て某種々修詮致せし故修怒ハ解たれど修勘氣
ゆりやさず修改心有て佛門に入るハ修親子修對面有ハ
必定(林)何ふも佛門修行あるハ(團)其修心底を聞上ハ此
度ハ師を改源信僧都ハ修父君共師資の修中他聞を憚り某
が親族ト云觸し必ず佛道怠りるハ(林)堅致を守るで
有らう(團)人目立ぬ様修幸壽丸ハ衣服と着替參らせよ
(門)畏てム升るト思入有て(林)門)下手へは入向ふハ(八

百)足早に出仲光殿我君の仰ハ美丈丸君の首早打ト
以の外の修怒(團)委細承知仕る(八百)遅刻さ様ト仕打
有ては入(團)思入有て(林)の脱捨し衣服を抱へ與へは
入此模樣宜敷道具廻
本舞臺都て座敷の体與ハ幸壽丸の(金太郎)出美丈丸様ハ
何れへ修出被成しウト與ハ(團)出其若君ハ最早此世ハ
ムらぬぞ(金)エ、ト驚く(團)そちも存せし如く若君の修
所業依て我君の仰ハ是非なく修首を討たるぞ(金)修修所
業惡敷共臣として君を弑すハ情なき斯と知りかハ若君
の修命ハ替らんものト(團)仕打有てコリヤ修若君を討し
と云ハそちが心を試さん爲(金)エスリヤ若君ハハ恙なく
修座有となト(團)美丈丸を落せし詞臺有て修身代立て
吳ハ(金)ハッ君父の爲ハ修身代立ハ武士の本懐(團)丈
夫の魂去乍今生の別母ハ一目(金)逢うて修歎懸んハ少し
も早く(團)此衣服を着替自殺せハ若君と思ふハ同ト年
齡故ト衣服を着替る向ふハ(新相中)の侍出信行殿ハ修狀

ガ參つてム升ト(團)聞見て只今出仕仕ると申傳ト(侍)ハ
ツト引返して入(金)使者の來ぬ間ハ生害ささんト差添を
腹へ突立(金)仕打有て父上修介錯を(團)云ハ及ぶト仕
打有て首を切與より橋立の(高)出ヤ、若君を打るハしハ
せめて名残りハ修顔をト(團)思入有て此世の名残り見せ
る程ハ必ず共ハ驚くハト首を見せる(高)ヤ、コリヤ我子
の幸壽丸(團)是密ハ致せト思入有て君の嚴命ト云詞臺有
て若君の修身代立しハ世間を憚る密事されハ此事決し
て洩せトト向ふより(八百)出仲光殿余りの遅刻ハ其方參
つて首打よとの仰を蒙り參つてム(團)只今修介錯を致
してム(八百)然らハ此由申上んトハ入(團)イデ某ハ君
の修前ハト行を引留(高)此世の名残り一目(團)未諫者ハ
ト振拂ハ此模樣宜敷道具廻
本舞臺元の修殿の道具ハ成爰ハ(左)(團右)下手ハ(八百)
(相中)の近臣(六人)居并ハ(左)美丈丸の首打しハ見届け
參りしハ(八百)此修修注臣申上んと立歸てム升るト向ふ

より(團)出(左)コリヤ仲光何故猶豫致せしぞ(團)ハッ乃
を當兼思ハ遅刻致てムるト包シ儘首級を出す(左)夫ハ
て天下の政道立世も満足成るぞ(團)イザ修實檢下さリ升
ムト(團)思入(左)仕打有て實檢致ハ及ハぬぞト愁ハを隠
仕打(團)思入有て何卒修首ハ愚臣へ下し置れ升る様願ハ
奉る(左)汝ハ望ハ任すべし(團)左樹ムらハ仰ハ任せ(左)
仲光大義(團)ハット辭義をする此模樣宜敷幕
(中幕の切)多田の院對面の堀本舞臺都て客殿の体(中二
階)の侍女(八人)居并ハ今日ハ三年以前修最期有リハ美
丈丸君又修獅子ハる滿茂様の修病死修退悼横川の僧都
様ハ修越ハ成修上ハる此多田の院へ修佛參ト襖を明知貫
の(團右)出侍女達ハ修盛様のお傍ハ(皆々)畏り升トト
入(團右)我意恨有る仲光を自滅させんと思ハ共君佛門の
志ハ深く彼ハ不忠を捨置るハ殘念至極ト下手より信行
の(八百)出(團右)思入有て修用の相濟升るか(八百)修法
會終れば役目ハ相濟升るハ承れば仲光殿を不忠成りと藤

よて嘲り召るが若君の汚首あげさるゝ不義を誅する是法
令(圓右)某が預りあべ一命小替お落し申切腹あして申譯
仕る(八百)モシ不忠の汚名が晒し時(圓右)一命捨ても
恨み申さぬト汚籠の内にて我君の汚出座ト呼床の淨璃理
小成汚籠を巻上る満仲の(左)僧都の(仲藏)(新相中)の近
臣(六人)小性(兩人)居并(圓右)汚法會滯無事終(八百)汚
彈師様おも汚苦勞よ不升る(仲)汚袂撥恐入我師長源年來
の師資の契淺うらね(圓)因お依くお招お預り導師の面目是
お過す満仲公よい愛子を先立汚愁傷思ひ遣夫お付て愚僧
が願お聞濟下さるや(左)何成義り發言致されよ(仲)先ッ
年我従弟とせし源賢と申者難行苦行の功積んで今碩學お
進し(圓)彼が右お出る者あけれと薄命よして父母お捨られ
孤獨の僧滿成殿の再び此世へ還られしと思召汚親子の因
をお結び下さらば彼が幸福此上なし(左)望所の汚媒介な
れ共治世と違ひ乱國の世も産れ出武ありたすみ闇愚無才
の身を以て大徳なる聖を子とあす(圓)心苦敷憂ゆるあり(

八百)汚辭退有も去事乍汚承引有て然るべしト(左)思入
有つて何よも承諾致と(仲)然らば汚案内を(近習)ハッ
下手へと入仲光の(圓)源賢の(家橋)を運出る(圓)我君の
汚承引何計りの有難く汚養子の汚案内仕り推參致して
升る(仲)大守よいお見覺がム升る(左)仕打有て三年
以前最期を遂シ美丈丸お違はねと年齢の相違有り(仲)ス
リヤお嫡子なりと思召ぬ(左)何嫡子と(仲)今の何を
かか隠申さん源賢阿闍梨の美丈丸殿(左)何と云る(仲)
仲光が持參の首級お身代りよて美丈丸殿の宗治と云者拙
僧方へ送りし故剃髮染衣をお進申汚勘氣汚免を願ひんと
罪惡消滅の爲汚修行お斯迄やつれし汚姿(左)あの折實檢
あさで首級お其儘遣せしが身代り立し何者成るぞ(圓)
則若君と(圓)同齡おて聊面さし似るるを幸ひ忤が首級をお
役に立てム升る(八百)知實殿是でいよも其儘お相成
升まい(圓右)あの折實檢あさば仲光殿を不忠と申さんや

今更後悔致てムる(仲)思入有て若君汚悔悟有る上は是迄
の罪惡の仲光父子が忠義よめで汚親子汚對面下さるべし
(左)汚懇節ある汚仰美丈丸の縱逸の罪お依て誅す今改めて
碩學の聖を末子となし何よも親子の對面致さんト上手よ
り操汚前の(圓)侍女付て出(圓)死せしと思ふ美丈丸お對
面おさく此席へ不作法お免てさもト(圓)左)へ詫る詞盡
有て(仲)汚勘氣汚救免の上源賢阿闍梨改めて對面有れ(一
家)父君母君思僧が大罪汚用捨被成て下さり升せ(圓)チ
、美丈丸おつくりしやト(兩人)詞盡有つて(左)ヤア果し
あさ其線言汚臺の席へと侍女介抱して座よ直す(左)不行
蹟成る美丈は換源賢を養子とあし親子の對面致す上り僧
都の丹情仲光親子の誠忠を必ず仇に思ふさよ(家)ハッ拙
僧も美丈丸と云し前の世の父君の意を背き汚成敗お相成
しガ忠死幸壽が屍を借再び此世へ生を得て父の汚前で改
て汚死の汚沙汰も源信と仲光が忠義の影と有難拜謝致す
(左)我あの折幸壽丸が首級と知らず其後幸壽丸如何と問

しよみまがりしとサせし身代り立しと最期の様子承
り法會を營遣したしト(圓)前幕の身代の筋の詞盡有つて
(左)天晴成幸壽が最期(圓)母も跡おて其由を聞たる節の
どの様ぞ(家)我の夫お引替て只縦逸に増長なし掛る忠
孝在る者を身代りせし罪深しせめての菩提の爲お一字を
建末世へ幸壽が美名を残さん(左)夫お能追善仲光事り愛
子を失ひ不本意成らん忌日お當滿成が忘記念を仲光の養
子となし度存するが家名お嗣す心あさや(圓)いので汚辭
退すべき(左)得心おれば多田の莊百余町を與ふべし(圓)
右)まだ其上お所領迄(八百)之とや忠義の功し(圓)重
重の汚賜有難存奉る(仲)誠よ今日ぞ廻れん忠孝の名の程
て(家)末世の鏡水面よ黄金の砂移る(八百)響とあくる
笹指山(圓)打奇る浪の鼓々(圓)その名所も多田川お只
々祈る君の汚武運(左)然らば仲光盃なさん(圓)スッヤお
盃を此お第(左)一家の因を致すて有う(圓)有難く存
奉升るト此模様宜敷(皆々)引張の見得おて蘇

大切本舞臺一面を簡屋の表掛都て吉原仲の町の体
 すがさよと幕明くと花邊より(福助)の白玉出る
 こゝへ(海老藏)のくわんべら四兵衛(左圓次)の仙
 平出て揚巻を取持てといふ事有ては入と(家橘)の
 白酒賣出て来り助六もわいたいといふ事有る直ふ
 河東節上るりも成向ふより(高助)の揚巻にて出て
 来りつゞいて(芝翫)の意久(福助)の白玉禿男達や
 りて若い者皆々附添出て来る又上るりの出よて(一
 圓十郎)助六よて出て意久との張合より福山のう
 んどんのおかしみより後お意久事本名伊賀平内左
 衛門ト云事知れてより助六も五郎時致と名のり友
 切丸の太刀を取戻し本望をとぐる迄みて目出度打
 出し縮くわしと第貳番目大切筋書は役者せりふ
 入めて出版のたしをりいへと何卒伊求之程すみう
 らすみ進づいとてい願上奉拜る

明治十七年四月二日御届

(定價金八錢)

日本橋區輿殼町一丁目四番地

平民

編輯兼出板人

齋藤長八

賣捌人

京橋區築地二丁目廿八番地

中村重次郎